

サイパンに残る日本の史跡保存をめぐる

(原案 国際交流学科 2年 中沢彩乃)

サイパン研修2日目、私たちは在サイパン日本領事駐在官事務所を表敬訪問した。ゼミ生は、日本政府がサイパンに残る日本の史跡保存にどのようなビジョンを持っているか、貴重なお話をたくさん聞き出したいと意気込んだ。しかし結果は、予想外なものだった。政府レベルで交流を行なうというのは、こうも難しいものなのだろうか、と狐につままれたような気になったのだ。

まず領事からサイパンの概略についてお話があった後、ゼミ生との質疑応答セッションが始まった。最初はソフトな話で始める。私たちのゼミでは秋の文化祭で、サイパン料理の屋台を出店する予定だったので、日本人にチャモロ料理を披露する上で、何かアドバイスをいただきたい、と述べた。領事は、フィジーからサイパンへ転任されてまもないので、まだチャモロ料理を召し上がったことがないそうだ。領事曰く『サイパンとフィジーは、地理的にも近く、料理も似ているため、チャモロ料理の味は大体想像できます』とのこと。しかし、フィジーでは、料理は蒸し焼きにするのが基本だが、サイパンでは、蒸し焼きにすることはない。僭越ながら、領事には1日も早くチャモロ料理を召し上がっていただきたいものだ、と思いつつ、本格的な質問にうつった。

ゼミ生からの最初の質問は、サイパンのチャランカノア地区に今も残る戦前日本統治時代の建築物の保存について、日本政府はどのような方針を持っているか、ということだ。(注1) 毎年私たちのゼミは、南洋興発本社跡、南洋興発製糖工場跡、そして今でも現地の人実際に暮らしている木造の旧日本人教員官舎などを見学する。それらの相当朽ち果てた状態はショッキングなもので、昨年度の研修時より一層荒廃しているようだ。日本政府として保存、補修など対応策があるのか知りたかった。すると、領事は、それらがどこにあるのかご存知ないという。毎年私たちのゼミ研修を企画してくれるパシフィック・イーグル社の松本氏が同席しており、助け舟を出してくれた。旧日本人教員官舎の方は、個人所有となっはいるが、CMNI HPO (Historic Preservation Office- 北マリアナ諸島政府歴史保存局) が管轄するようになった、しかし、手入れは全く行なっておらず 庭は草ぼうぼう、家屋は雨漏り状態、と説明してくれた。(写真2、3、4)

領事は次のように答えた。領事個人としては、日本の企業などが援助をしたりする分には、構わないと思っている。しかし、ここサイパンは、現在アメリカ自治領で、来年6月には、正式にアメリカの一部となる。すると、アメリカを差し置いて、日本側

が勝手に動くわけには行かない。もしも、そうした活動をするならば、日本ではなく、アメリカがしなければならないのだ、と。さらにサイパンはアメリカの一部なので、ODA（途上国開発援助）の対象になり得ない、ということも日本が資金を出せない一因となっているらしい。

次は、中国出身のゼミ生が質問した。サイパンへの観光客の中で日本人が一番多いのは、昔この島が日本のものだったことと関係あるのだろうか。領事は、おそらくダイビングなどにくる観光客はそうした歴史を全く知らないであろうと答えた。ゼミ生は、その点を領事がどのように考えるか質問してみた。領事は、以下のように強く語られた。せつかく日本人がサイパンに来るのなら、ぜひ歴史を知って欲しいし、太平洋戦争で何万人という日本人がここで命を落としたのだから、慰霊も行なって欲しい。しかし慰霊はあくまで個人の行為で、誰も強制はできない。こうした問題の原点をたどると、日本の教育がこれまで戦争や植民地の事実を教えてこなかったことにある。若い世代の人たちに教えてこなかったのだから、知るはずも関心をもつはずもない。だが誰も慰霊を強制できないように、歴史を学ぶことについても強制はできないのだ。領事はこうして、この問題にひそむ深刻な矛盾を私たちに示した。

以上のような質疑応答から、ゼミ生はサイパンと日本の交流を促進するために、日本政府として出来ることは全く無いような印象を持った。領事のお話し通り、サイパン島内の日本に関わる遺跡保存の動きは、日本政府には無い。しかし、日本の企業・団体による保存の動きに関しても、具体的な例は挙がらなかったし、一方北マリアナ諸島政府や米国政府が、前向きな姿勢を見せているという情報もなかった。

昨年のゼミ研修で訪れた北マリアナ短期大学の歴史学教授は、島に残る神社の保存に関しては、日本の神社本庁・神道関連団体が積極的に援助を申し出てくれればありがたいのに、そういう話しは全く聞かない、と嘆いていたという。(写真5)。昨年と今年のゼミ研修では、サイパンのジャングルの中にある『八幡神社』という史跡を見学した。ここは、1930年代に建造され鳥居、参道、燈籠、狛犬、手水舎(ちょうずや)、本殿などが太平洋戦争の戦火を逃れて生き延びて、当時の姿をとどめる貴重な史跡で、戦後この地を所有することになったグレーロ家が個人管理してきた。(注2) 昨年度、ゼミ生がこの八幡神社を訪れた日は偶然にも、北マリアナ諸島政府歴史保存局によって公の史跡と認められた日で、ゼミ生は、お祝いに駆けつけたマリアナ知事、下院議員と共に昼食をご馳走になった。しかし今年八幡神社を再訪すると、グレーロ氏は、政府のより積極的な支援を求めべく、ゼミ生たちの署名を集めて苦勞しているようだった。

今回の研修中に見た唯一の例外は、松江春次を記念したシュガーキング・パークである。松江氏の子孫からの基金で、公園内にJapan Cultural Centerの建設工事が進められていた。ただ公園の端に置かれたサトウキビ列車はサビの度合いが進み、昨年のゼミ生のように車台の上に乗って記念撮影することが危険なくらい劣化していたのが気に

なった。

こうしたサイパンの現状に対して、日本が出来ることとは、一体何だろうか。まず民間レベルでサイパンの歴史を伝える努力から始めなければいけないと思う。日本人には、〈サイパン＝南国リゾート〉というイメージが強すぎ、サイパンと日本が戦前から深い関わりにあることを知る人は少ない。サイパンを訪れる日本人観光客から「教育」「啓蒙」していくのはどうだろう。

ところがこれも難しい。領事を訪問したと同じ日の午前中に訪問した北マリアナ諸島政府観光局の日本担当者は、「植民地と戦争の思い出」を語ることに否定的だったからだ。『産業的によい影響を与えてくれる観光客は、島の経済にとって何より大事です。だからこそ、日本人には、サイパン＝南国イメージを前面に押し出し、悲劇的、後ろ向きなこと、マイナス・イメージになるものは見せたくないのです』とのことだ。私たちの文化祭屋台企画では、チャモロ料理の味を伝えるだけでなく、今回の研修で見てまわった日本統治時代の遺跡の写真も同時に展示する案が出ている、と話したところ、かなり強く、即座に反対されてしまった。曰く『サイパンで戦争があったことは本当のことです。しかしいつまでも「サイパンは戦争が起こったところ」とのみ思われていたくないのです。戦争のイメージからは出来るだけ離れたたいと思っています』とのことだ。

しかしそれは違うのではないか、とゼミ生は考えた。日本人は、今まで自分たちがやって来たこと、自分の国がやって来たことについて、個人として知る義務と責任があると思う。観光産業なくして、サイパン経済が成り立たないのならば、戦争や植民地の遺跡も「観光スポット」にして、日本人観光客の関心を高めていくようにすれば良いのではないだろうか。丁寧な説明を加えれば、若い世代もきっと興味を持つだろう。先の領事のお話しによると、バンザイ・クリフは、比較的観光客にも有名で、利益があるために、政府レベルで整備がされてきているという。これ以外にも、米国政府が管轄経営しているアメリカン・メモリアル・パークというサイパン戦を追悼する博物館が、ガラパンにあり、観光スポットになっている。昨年も今年もゼミ生はここを訪れ、アメリカの視点から、現在の日米友好を気にしつつ戦争が語られていることに不満をもらしていたが、これも「戦争」を観光スポットにしている例である。他の植民地統治時代の遺跡や戦争の遺跡も、保存・保護を行なって、「はずせない」観光ルートの中に組み入れるようにしていけないものだろうか。

〈植民地統治と戦争とリゾート〉は一見相反するもので、観光産業に活かすのは、道徳的に問題があるかもしれない。だが、過去の記憶から目をそむけて、過去を否定したり、あたかも過去が存在しないようにふるまうのは間違っていると思う。日本人は、過去と現在が共存している状態のサイパンを理解し、受け入れていくのが最善の方法ではないだろうか。

研修3日目に訪問したマナムコ・センター（老人のための公立デイ・ケア・センター）で会ったお年寄りの中には日本語を流暢に喋る方もたくさんいた。昭和31年（1956年）に日本で流行った曲『ここに幸あり』は、ここのお年寄りの大好きな歌だ。私たちゼミ生がこの歌を披露したところ、お年寄りも加わって合唱となった。その後お年寄りは次々にマイクを握って「お手てつないで」「雨あめふれふれ」「浦島太郎」「桃太郎」「雀の学校」「夕やけこやけ」といった童謡や、私たちの知らない軍歌、戦前の恋愛流行歌（ナツメロ？）などなどを歌い踊ってくれた。「なかよし、つなよし（?）、おっさらい」「いしのせ、いしのせ」と歌いながら、見事なお手玉を披露してくれたおばあさんもいた。（写真6）日本統治時代に覚えたものだったり、統治終了後も日本文化をなつかしがって忘れずにいてくれたのだろう。日本が関わった過去は、確かに息づいているのだ。

他のゼミ生が論じるように、今回の研修ではサイパンをめぐる複雑な国際状況を学び、日本がサイパンの史跡保存について動くことは簡単でないことを実感した。その反面、そうした困難な課題を克服することに、今後の日本の国際交流を発展させるヒントが隠されているのではないかとも、また強く感じるのである。（注3）サイパンに残る過去の日本の面影は、今消えつつある。早急に何とかしないとまらないのだ。

注1： 辻原万規彦，今村仁美，香川治美 『サイパン・チャランカノア地区に残る日本委任統治時代の建築物（1）－戦前期日本の南方進出に伴う建築活動と室内環境調整手法に関する研究その6－』 日本建築学会関東支部研究報告集（計画系），第73号，2003.3.

* 辻原教授のホームページ『研究業績』にて閲覧可能。

<http://www.pu-kumamoto.ac.jp/~m-tsuji/gyouseki.html>

* 丸平木材店ホームページ「サイパンに残る日本住宅」も参照のこと。

<http://www6.ocn.ne.jp/~maruhira/zakit/zakki008.html>

注2： 八幡神社の概要については CMNI HPO の以下のURL を参照。

<http://www.nps.gov/nr/feature/asia/2005/Hac.htm>

注3： 笹川太平洋島嶼国基金（笹川平和財団）「ミクロネシア地域における遺跡保護管理の人材育成」事業評価および当該地域への援助の実態」（2003年12月）

http://www.yashinomi.to/zatsu/rep_0312.html



1. 在サイパン樋口勉領事と。



2. 教員官舎前にて（2007年度）。



3. 上と同じ建物前にて（2008年度）。

1年間、草刈りなどの手入れが行なわれておらず、建物に全く近づけなくなっていた。



4. 廃屋として残る南洋興発本社跡。
建物内のトイレ部分だけが、現在も「公衆トイレ」として「活用」されているようだ。



5. 神社だけでなく、かつての東本願寺も このように無残な残骸として残っている。



6 : 見事なお手玉を披露するお年寄り。